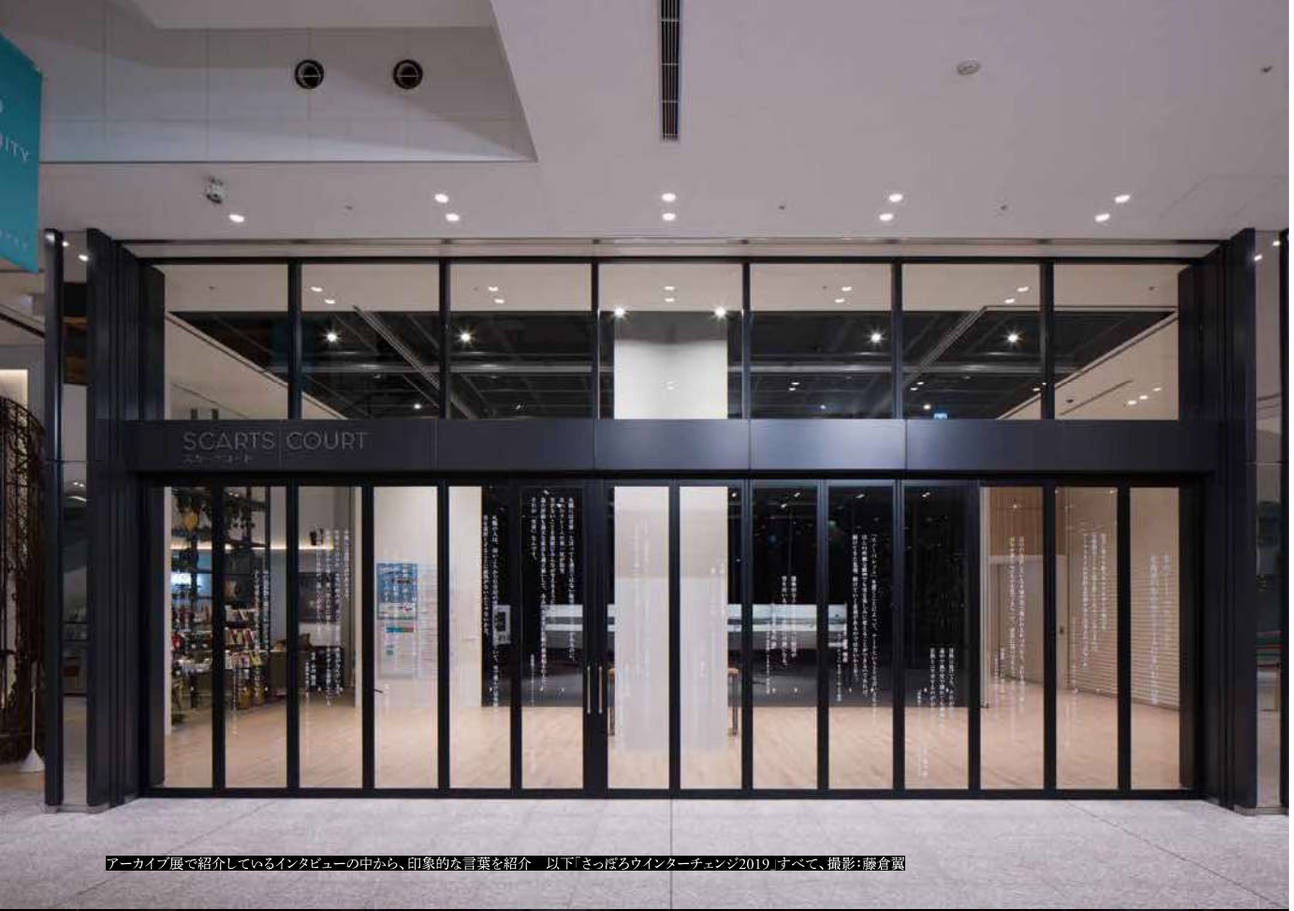


アーカイブ展で紹介しているインタビューの中から、印象的な言葉を紹介　以下「さっぽろウインターチェンジ2019」すべて、撮影：藤倉翼

アーカイブ展「What's winter art? ―冬のアートを辿る―」会場の様子

さっぽろウインターチェンジ2019

Sapporo Winter Change 2019

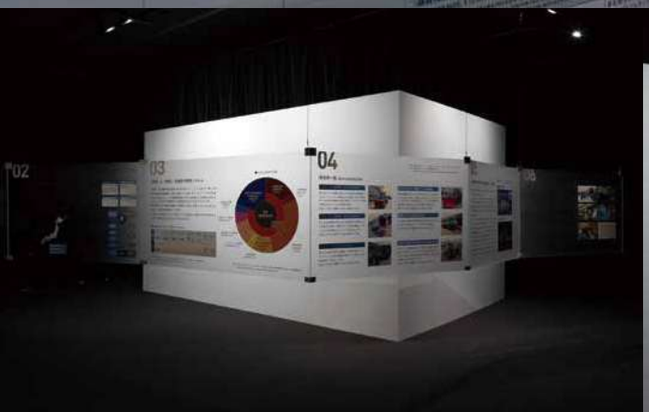
冬の環境を、新しい視点から捉える

会期	2019年2月1日（金）～6日（水） 10:00～18:00
会場	SCARTSコート、SCARTSスタジオ
入場料	無料
主催	札幌市
企画運営	札幌文化芸術交流センター SCARTS（札幌市芸術文化財団）
協力	札幌国際芸術祭実行委員会、札幌駅前通地区活性化委員会
助成	平成30年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

「さっぽろウインターチェンジ」は、雪が最も多いといわれる2月に開催している冬のプログラムです。札幌の厳しい冬を新しい視点から見ることで、これまでとは違う面白さや特徴を発見しようと、外部のイベントや団体とも連携しながら、さまざまな取り組みを行っています。

「さっぽろウインターチェンジ2019」では、厳しい冬をアートでいかに楽しくできるのかをテーマに、札幌市北3条広場アカプラで開催されているアートイベント「さっぽろユキテラス」や、札幌市資料館（旧札幌控訴院）で開催されている「さっぽろ垂氷まつり」と連携し、開催しました。北海道で過去に開催された冬のアートプロジェクトをたどるアーカイブ展「What's winter art? ―冬のアートを辿る―」や、除雪に焦点を当て、SIAFラボと共同制作したメディアアート展示「SNOW PLOW TRACE ―雪の痕跡―」、連携イベントに関連するトークイベント等の取り組みを行いました。

これまでに行われた冬のアートプロジェクトを年表と詳細なパネルで紹介した



「SNOW PLOW TRACE ―雪の痕跡―」会場の様子

札幌市の除雪の仕組みや除雪車の種類など、さまざまな情報をパネルで紹介した

《除雪車操作体験 VR》2019 年

タブレットを動かすと、除雪車から見たあらゆる方向の景色を見ることができる

アーカイブ展「What's winter art? ―冬のアートを辿る―」

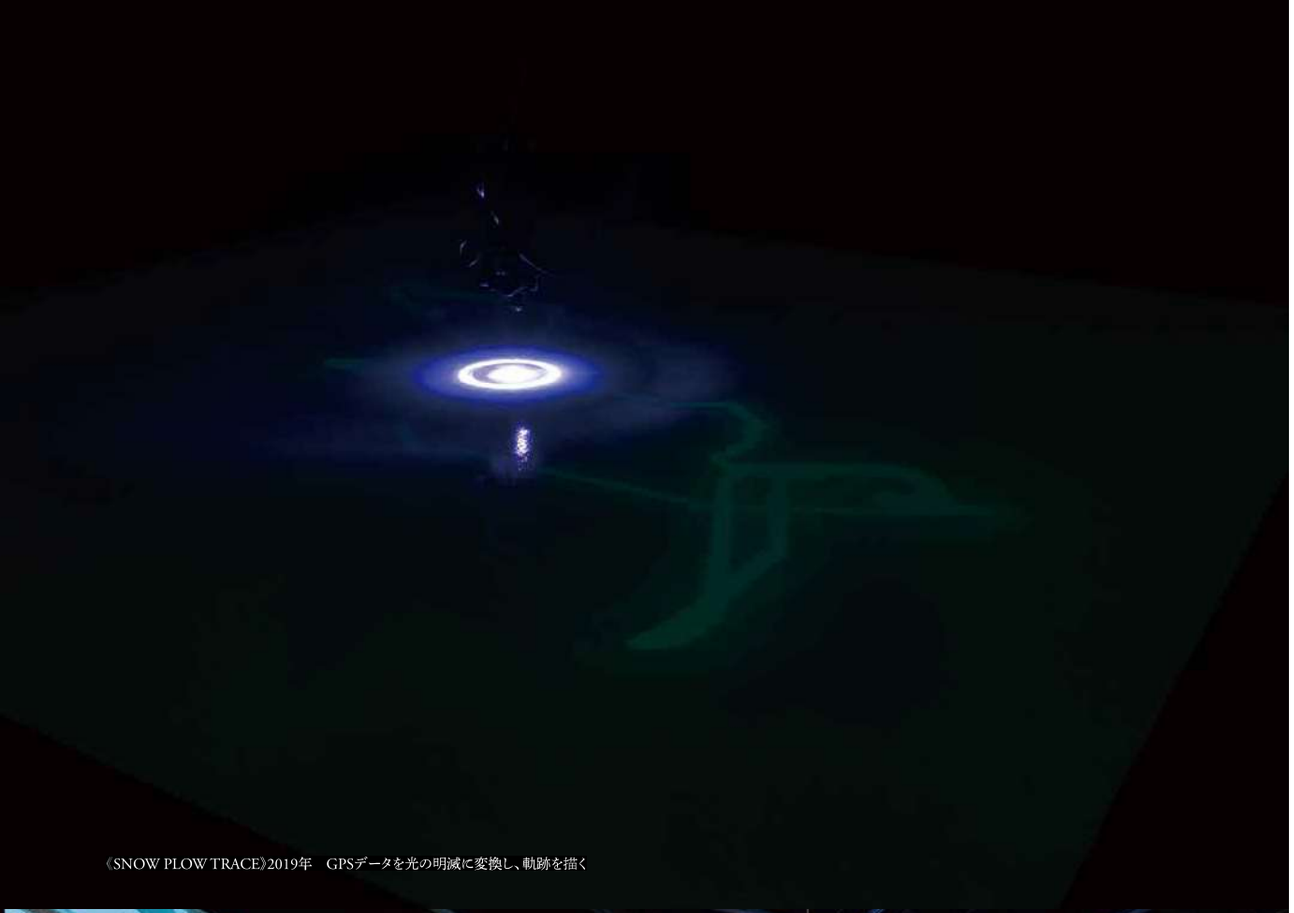
監修 吉崎元章（札幌文化芸術交流センター SCARTS プログラムディレクター）
調査協力・データ提供 アートとリサーチセンター／さっぽろ天神山アートスタジオ

1950年から始まった「さっぽろ雪まつり」を筆頭に、北海道各地では、厳しい冬の寒さや雪、氷などの環境的な特徴を活用して楽しむ取り組みが、数多く試みられてきました。その中には、アートによるアプローチもみられます。氷雪像づくりはもちろんのこと、多様な手法で北国の冬の特性と積極的に関わった作品やプロジェクトが脈々と展開されてきました。その連なりは、この地で活動する意義の模索、そして、この地ならではの新しい表現探求の系譜ともいえるでしょう。冬を多様な視点から捉えるさっぽろウインターチェンジの一環として、これまでの一連の冬のアートプロジェクトを年表でたどると共に、注目すべきプロジェクトをパネル展示や関係者のインタビュー映像などにより紹介しました。
展示された年表データや動画は、SCARTSウェブサイトにて公開しています。

展示「SNOW PLOW TRACE ―雪の痕跡―」

ディレクション 岩田拓朗（札幌文化芸術交流センター SCARTS テクニカルディレクター）
制作 石田勝也、小町谷圭、船戸大輔（いずれもSIAFラボ プロジェクトディレクター）、藍圭介、金井謙一（いずれもSIAFラボ テクニカルフェロー）
協力 札幌市雪対策室

SCARTSでは、冬ならではの環境やそこから取得される情報を「メディア」として捉え、さまざまな表現に変換していくプロジェクトをSIAFラボと共同で行っています。その一環として、2019年のさっぽろウインターチェンジでは、除雪車に搭載するGPSから得られたデータをビジュアライズし、除雪の痕跡を想起させるメディアアートインスタレーションを実験的に制作しました。また、除雪車の操作を体験できるVRや、除雪に関する資料のパネル展示も行いました。
「除雪」という行為をメディアとして捉え直すことによって、札幌というユニークな都市や環境との関係について、これまでとは異なる角度から考える契機になることを願い、長期的な視点でリサーチと開発を進めています。



《SNOW PLOW TRACE》2019年　GPSデータを光の明滅に変換し、軌跡を描く

トークセッション「What's winter art? ―冬のアートを繋ぐ―」

「さっぽろユキテラス 2019 アーティストトーク」

「とっておきの『メディアアート』大集合！」

［関連イベント］

トークセッション「What's winter art? ―冬のアートを繋ぐ―」

日時　2019年2月2日（土）14:00〜16:00
会場　SCARTSコート
入場料　無料
出演　柴田尚（NPO法人S-AIR代表／北海道教育大学岩見沢校教授）、
漆崇博（一般社団法人AISプランニング代表理事）、今村育子（美術家／札幌駅前通まちづくり株式会社）
モデレーター　吉崎元章（札幌文化芸術交流センター SCARTS プログラムディレクター）

これまでに冬ならではのさまざまなアートプロジェクトに取り組んできた方々にお集まりいただき、アーカイブ展で紹介しているプロジェクトを中心としたプレゼンテーションを行いました。雪を扱う難しさや面白さ、寒冷地で行うプロジェクトの可能性など、札幌ならではのトピックについて語りました。

「さっぽろユキテラス2019 アーティストトーク」

日時　2019年2月3日（日）13:30〜15:30
会場　SCARTSコート
入場料　無料
出演　今村遼佑、小金沢健人、タムラサトル、山内祥太、ラップランド大学芸術・デザイン学部
モデレーター　高橋喜代史（美術家／一般社団法人PROJECTAディレクター）

札幌市北3条広場アカプラを舞台に開催されている「さっぽろユキテラス2019」と連携して、参加作家によるトークイベントを開催しました。

札幌国際芸術祭2020 ディレクターズトーク第2弾「とっておきの『メディアアート』大集合！」

日時　2019年2月3日（日）16:30〜18:30
会場　SCARTSコート
入場料　無料
出演　アグニエシュカ・クビツカ=ジェドシェツカ（SIAF2020 企画ディレクター〔メディアアート担当〕）、
馬定延（研究者）、小町谷圭（SIAFラボ プロジェクトディレクター）
モデレーター　細川麻沙美（札幌国際芸術祭事務局統括マネージャー）

2020年度の冬季に開催を予定していた札幌国際芸術祭（SIAF）2020に関連したトークイベントを行いました。企画ディレクターのうちメディアアートを担当するアグニエシュカ・クビツカ=ジェドシェツカ氏と、メディアアートの研究者である馬定延氏、SIAFラボ プロジェクトディレクターの小町谷圭氏が、おすすめの作品を紹介しながら、メディアアートの魅力について語りました。

左から、吉崎元章、柴田尚、漆崇博、今村育子　撮影：藤倉翼

Talk Session
What's winter art?

トークセッション
What's winter art?―冬のアートを繋ぐ―

日時　2019年2月2日（土）14:00〜16:00
会場　SCARTSコート
出演　柴田尚（NPO法人S-AIR代表／北海道教育大学岩見沢校教授）
漆崇博（一般社団法人AISプランニング代表理事）
今村育子（美術家／札幌駅前通まちづくり株式会社）
モデレーター　吉崎元章（札幌文化芸術交流センター SCARTS プログラムディレクター）

吉崎　本日は、お寒いなかお集まりいただきましてありがとうございます。モデレーターを務めさせていただきます札幌文化芸術交流センター SCARTSの吉崎と申します。よろしくお願いします。本日のトークセッションのテーマは、「What's winter art?―冬のアートを繋ぐ―」です。北海道では、これまでにもさまざまな冬のアートプロジェクトが行われてきました。本日は、それらに関わられている3名の方をお招きしています。

本日の流れですが、まず私から、ご登壇の3名が関係したプロジェクト以前の、北海道の冬のアートの動きについて簡単に振り返った後、それぞれの方に各プロジェクトについてお話しいただきます。後半は、その中から浮かび上がってきた関連性や課題、そして、これからの夢や可能性について話し合っていきたいと思っています。

この会場では、「さっぽろウインターチェンジ」の一環として、冬のアートプロジェクトのアーカイブ展を開催しています。次回2020年の札幌国際芸術祭は冬に開催されることが発表されましたが、北海道ではこれまでにも、さまざまなアプローチによる冬のアートプロジェクトが行われてきました。この展示は、それらを一度まとめ、この地ならではの表現を考える機会にしたいという思いから始まったものです。アーティストに対しては刺激を与えるものになってもらえるとうれしいですし、一般の方にも、冬への多様なアプローチを知ることによって、寒さや雪に対する見方を新たにし、それらを楽しむことにつながればと考えています。

冬、雪に関連した アートプロジェクトの3つの傾向

吉崎　展示している年表では、アートとリサーチセンターの協力のもと、冬の屋外をメイン会場として、アーティストが何らかのかたちで関わったものをピックアップし、30のプロジェクトを取り上げました。それを分類すると面白い傾向が見えてきましたので、紹介していきたいと思います。

ひとつめの傾向は、雪や氷によって大きな像などをつくり、それらを中心とした観光的なお祭りをするというものです。世界的にも知られている「さっぽろ雪まつり」がその代表的なもので、1950年に始まり、70年の歴史があります。それ以外にも「旭川冬まつり」をはじめ大小さまざまなものが道内各地で行われています。冬のイベントと言うと、このような雪像を中心としたものが王道ではないでしょうか。

雪ではなく、氷による造形物をメインとしたものとしては、層雲峡温泉の「氷瀑（ひょうばく）まつり」があります（写真1-1）。

吉崎元章

1962年苫前町生まれ。札幌芸術の森美術館に開館準備期から学芸員として関わり、札幌および北海道内の美術史や動向を広く研究。「中根邸の画家たち」「さっぽろ・昭和30年代」など、札幌の美術を扱った展覧会を多く手掛ける。一般財団法人地域創造参事を経て、2018年4月より札幌文化芸術交流センター SCARTS プログラムディレクター。

写真1-1　第1回層雲峡温泉氷瀑まつり、1976年
写真提供：層雲峡観光協会

写真1-2　さっぽろホワイトイルミネーション、1981年、札幌大通公園
写真提供：札幌ホワイトイルミネーション実行委員会

写真1-3　一ノ戸ヨシノリ《大地のあかりHOMAGE TO SNOW》
第2回あさひかわ雪あかり'92、1992年、常磐公園、旭川　撮影：荒井善則

写真1-4　防風林アートプロジェクト、2014年、空港線沿い防風林および雪原、帯広　写真提供：帯広コンテンポラリーアート実行委員会

写真1-5　第2回なよろ国際雪像彫刻大会ジャパンカップ、2002年、名寄市南広場　写真提供：なよろ観光まちづくり協会

1976年から開催されています。そして1979年からは支笏湖でも「氷濤（ひょうとう）まつり」が始まります。これらは、芯棒に水を吹きかけながら凍らせ、幾重ものつらら状の氷からなる大きな造形物をつくっていくもので、当時恵庭に住んでいた彫刻家の竹中敏洋が発案し、指導したのがその始まりです。

こうした流れのなかで、鑑賞するだけではなく、中に入ることができるものも現れました。氷でホテルやレストランをつくるものです。早い例としては1980年に始まった「しかりべつ湖コタン」があり、現在も続いています。ほかにも、トマムや当別、最近では、キロロやニセコでも氷によるお店やホテルなどをつくる動きが、主催者が代わりながらも脈々と続いています。

ふたつめの傾向ですが、雪や氷以外の素材による造形作品や、電球などの発光物を雪景色のなかに設置するものです。

そのひとつが1981年から大通公園で始まった「さっぽろホワイトイルミネーション」です。観光的な要素も強いのですが、当初は、動く彫刻で知られる彫刻家の伊藤隆道がオブジェのデザインを担当していました（写真1-2）。さらに、会場内で「光の造形展」という、当時はハイテクアートと呼んでいた、最新鋭の技術を使った光る造形物の展覧会も併設したアート色の強いイベントでもありました。

また、旭川でも1991年から「あさひかわ雪あかり」が行われています。枝や布を使った行灯を常磐公園に設置するイベントとして始まったのですが、初期の17年間にわたりプロデュースしていたのが、旭川在住の前衛美術家一ノ戸ヨシノリです（写真1-3）。現在は、さらに全市的な広がりをもって多くの市民が参加するお祭りとして展開されています。

また、比較的雪の少ない帯広では、造形作品を屋外に設置する取り組みが、20年ぐらい前から見られます。最近では、2014年の厳寒期に広大な畑作地帯で47人の作家たちが作品を展示した「防風林アートプロジェクト」が記憶に新しいところです（写真1-4）。

3つめの傾向は、雪や氷を素材として彫刻作品をつくるというものです。雪まつりでは、精巧なお城や宮殿、あるいは、人気のアニメキャラクターなどを大きくつくることが中心となっていますが、それらとは異なり、抽象的な彫刻など立体的な作品として制作するものです。

粘土、石、木などでは到底できない巨大なものも、雪ならば容易に可能になる。それが魅力のひとつです。

事例としては、1989年から3回、札幌芸術の森で行った「雪と氷の造形展」がありますし、さっぽろ雪まつりの国際雪像コンクールのなかにもそうした傾向のものが見られます。さらに、2001年から始まった「なよろ国際雪像彫刻大会ジャパンカップ」も続いています（写真1-5）。本郷新記念札幌彫刻美術館でも「さっぽろ雪像彫刻展」が行われています。

こうした、言うなれば雪像お祭り系、造形物設置系、雪の彫刻系のものがしばらく続くのですが、2005年を境に、新たなアプローチのものが一気に増えてきます。社会や人との関わりを重視するという傾向のものです。この2005年の分岐点といえるのが、モエレ沼公園で行われた「スノースケープモエレ」です。今日、登壇した皆様にお話しいただくのは、ここから後のことになります。「スノースケープモエレ」には柴田さんが深く関わっていますし、その後の興味深いプロジェクトにはおふたりが関わっていますので、どのような新しさを広げてきたのかを中心に、お話しいただければと思います。

柴田尚―スノースケープモエレ、アイスギャラリープロジェクト

冬のアートプロジェクトに関わるようになったきっかけ

柴田　柴田と申します。NPO法人S-AIRでアーティスト・イン・レジデンス事業を20年やっていまして、6年前からは北海道教育大学でも教えています。

まず、僕のアートプロジェクトの話をする前に、なぜ僕が冬のアートプロジェクトに興味を持ったかをお話ししたいと思います。

柴田尚

1962年歌志内市生まれ。NPO法人S-AIR代表。北海道教育大学岩見沢校アートプロジェクト研究室教授。「スノースケープモエレ」ほか、さまざまなアートプロジェクトやアートスペースの立ち上げに関わる。2008年国際交流基金地球市民賞受賞（S-AIR）。2016年北海道文化奨励賞受賞。

冬のアートプロジェクトをやっていると、よく「北海道には冬があるからね、冬が好きでしょう」と言われます。皆さんはどうですか？ 冬が好きですか？ 僕はスキーもしないし、そんなに冬が好きなわけではありません。ではなぜ、冬のプロジェクトをやることになったかというと、きっかけは突然でした。2003年に、「ニューヨークの曽根と申しますが……」という電話を受けたんです。「何をなさっている方ですか？」と聞くと、「アートをやっているんですけど……」と言われました。それで、アーティストの曽根裕さんだとわかりました。ドクメンタや国際芸術祭の常連のとても有名な方で、お会いしたこともなかったんですけど、「実は、雪で作品をつくりたい、消えてなくなるものをつくりたいんです」というお話だったんです。なぜ僕に電話をくれたのかというと、誰に話をしていいのかがわからなくて、当時トヨタ・アートマネジメントにいらっしゃった熊倉純子さん（現・東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授・研究科長）に相談して、僕の電話番号を教えてもらったんだそうです。

彼は本当にプランを送ってきましたが、30mの雪像の小便小僧がコンピュータ制御でおしっこをしてスポンサーネームを書くとか、氷山を1個持ってくるとか、とんでもないものでした。そこに参加するというポール・マッカーシーなど、教科書に載るような有名なアーティストからも、ファックスが送られてきました。彼らはすでにお金持ちになっていますので、もうお金なんかには興味がないんです。消えてなくなるものをつくりたいという、アーティストとしての究極の欲望ですよね。それが、僕はすごく面白いなと思ったんです。それで、いろいろと調べてみたのですが、さっぽろ雪まつりで行うのはかなり難しいことがわかりました。まず1区画を借りるのに700万円も払わなければならないんです。そして、当時は色つきのものはだめでした。さらに、天井があるものもだめです。また、地下街がある関係なのか、場所によっては重いものもだめでした。

いろいろ調べてみて面白いと思ったのは、冬の大型国際芸術祭は世界中を探してもどこにもないということです。これは今も変わっていません。唯一、行われたのが、この次の年の2004年に、フィンランドのロバニエミとケミという人口2、3万人の小さなまちで、4億円をかけて開催された「SNOW SHOW」でした。こ

れは、建築家とアーティストのコラボレーションとして行われたもので、世界中で話題になりました。飛行機で行く人もいたし、自家用ジェット機で行く人もいたようです。世界で1万数千媒体に載ったのですが、やったこともないことをやってしまったので大赤字で、1回で終わっています。僕は、この企画は、雪の技術のある札幌だったら赤字を出さないでもできるのではないかと思いました。

結局、曽根さんとのプロジェクトは、僕が忙し過ぎてお会いすることができなかったのもあり、実現できず、何となく宙に浮いたままになってしまいました。それ以前は、僕も冬に対して特別な思い入れはありませんでしたが、この件で僕が面白いと思ったのは、まず、アートの中心地であるニューヨークでは実現できないということです。そして、そこから日本の中心地である東京に相談が行ったけれども、東京でもできないということ。しかし、札幌でならできるだろうと考えられたという点です。つまり、札幌で冬のアート情報を何らかのレベルで出した場合、世界的にもとても優位なアート情報として出すことができるというイメージが、そのときに僕の頭の中で完成しました。今、もしかしたら現実の方が少し近づいてきているのかなという気もしています。これが2003年の出来事です。

一から関わった「スノースケープモエレ」の変遷

柴田　これからお話しするのが、それから2年後の「スノースケープモエレ」というプロジェクトについてです。モエレ沼公園が2005年に完成して、このイベントがスタートしました。2012年まで7年間行いました。その後は続いていませんが、不思議なことにこのプロジェクトのレクチャーを、僕はいろんなところでし続けています。

札幌には有名な「さっぽろ雪まつり」がありますが、もともとはひとりの彫刻家である高校教師と学生が始めたものです。最初は芸術家が関わっていたのですが、最近はほとんど関わっていません。そこで、地元のアーティストたちと共に、「もうひとつの雪まつり」をつくれないかと思って始めたプロジェクトでした。

直接の背景としては、モエレ沼公園の完成に際して、アートツーリズムの関係で何かできないかという話があり、広告代理店や旅行会社などいろいろな企業の人たちが参加して、半年にわたり会議が行われていました。その中でアート関係者は僕を含めてふたりだけでした。「アートツーリズムをやりたい、何か企画をしてほしい」とは言われていたのですが、でも、僕はあまり気が乗らなかったんです。というのも、会場であるモエレ沼公園はあまりにも大き過ぎますし、デザインされ過ぎているので、人の作品の上に作品をつくるような感じだから、何をやっても目立たないだろうと思ったんです。

また最初、モエレ沼公園にはアート関連のスタッフがいませんでした。なぜだかわかりますか？　ここは公園だからです。主催は札幌市緑化協会なんです。緑や公園についてのプロはいるけれども、アートのプロがいなかった。さらに、予算は0円でやってくれと言われました。あの広大な敷地でですよ。

でも、僕は驚きませんでした。当時は、建築をつくってもソフトにはお金をかけないというのが普通だったし、建築家がプロデューサーみたいな感じで、ちょっと上下関係があって、「やらせてやるよ」という感じだったからです。これに僕はカチンときまして、普通だったらそこで断るんですけども、そのときに、ふと、「冬だったらやってもいいな」と思ったんです。

会議に参加しているメンバーはみんな、モエレ沼公園に新たにできる噴水を目掛けて、何らかのイベントをつくろうと提案していました。そこに人が集まることがわかっているし、予算もつくからです。でも僕は、「そういうものはやる人がたくさんいるから、もういいんじゃないですか？」と言っていたんです。でも、予算は0円ですけれども、何かをやってくださいと言われたので、冬に目を向けました。冬は噴水も止まるし、あのあたりは高い建物もないので、地吹雪もあるし冬はかなり厳しい地域なんです。でも公園は冬も開いてるというんですね。「そんな場所に、お客さんは来ないんじゃないですか？」と聞いたら、「来ないかもしれないですね」と言うんです。それを聞いて、「あ、それじゃあ、やってみましょう」と僕は言いました。冬だったら、イベントをやって効果があったのかどうかがわかりやすいから、やる意味があると思ったんです。

それに、2年前に曽根裕さんから相談されていたのがそのまま宙に浮いていたことも頭の中にありました。冬に何かをやれないかと思ったんです。それと、冬を選んだのは、やはりイサム・ノグチの作品が隠れるからです。つまり、本当の風景、原初の風景に戻るからです。イサム・ノグチの上で何かをやっても、イサム・ノグチ以上に目立てないですからね（笑）。また、札幌市の除雪の予算は、当時は90億円と言われていました。雪がある種の「公害」のように扱われていたので、冬をもう一度再発見しようとも思ったんです。

そこでまずは、予算をつくるところからだと、地域創造の公的助成を使うことを提案しました。地域創造というのは宝くじのお金などをもとに、公的な文化施設がソフト事業を行うときに助成をしてくれるところです。でも、モエレ沼公園が文化施設と言えると思いますか？　つまり、文化施設と言える概念からつくらなければいけないんです。だって、公園ですからね。でも、そのときの園長がたまたまアートが好きな人で、スタッフとして、アーティストの小川智彦君が入って、さらに、新卒でしたけれども学芸員も雇うという話でしたので、何とかなるのではないかと思いました。申請書は誰も書いたことがないと言うので、僕が原案を作成して、緑化協会のスタイルでアレンジしてみてくださいと伝えました。そのかわり実現したら仕事させてくださいという感じで、お金や体制をつくるところからスタートしました。そうやって「スノースケープモエレ」が始まりました。

最初の年は、作品を雪でつくるとしてもプロがいないので、いろいろな学校の学生たちに声をかけました。そして、都市計画のアートを手掛けているカミーユ・フェルシュフーレンを呼びました。

2年目は、もう少し賢くやろうと、メディアアートを使いました。ここは風が強いから、風の向きで光るオブジェもつくったりしています（写真2-1）。

それから、屋内も使うことにしました。普段使われていないような場所を探し、雪の貯蔵庫で行いました（写真2-2）。夏の冷房用に雪を入れておく場所なので、冬は空っぽです。季節逆転が面白いのでここも使ってみることになり、その中にヒマラヤに見立てた雪山をつくって、ソリもつくって、コンサートをやりました。あるいは、冒険スキーヤーや登山家を呼んでキャンプもやりました。

写真2-1　tEnt《tEnt03-catch the white breath》スノースケープモエレII、2007年、モエレ沼公園　撮影：小牧寿里

写真2-2　《BASE CAMP》スノースケープモエレ6、2011年、モエレ沼公園雪倉庫　写真提供：NPO法人S-AIR

写真2-3　ヨハン・ヨハンソン ウィンターステージ《Notes of SNOWY/CRYOGENIC REGION積雪低温地帯の旋律》スノースケープモエレII、2007年、モエレ沼公園ガラスのピラミッド　撮影：小牧寿里

さらに、音楽もつくってみようということで、ヨハン・ヨハンソンというアイスランドのミュージシャンを招きました（写真2-3）。「ガラスのピラミッド」の中は、残響音が9秒もあるんですよね。だから、どんな音楽でもいいところではありません。バンドをやっても全然わからないだろうし、マイクでしゃべっても何を言っているかがわからない。冬にあの空間の残響を扱える人ということで、彼を招いて、曲をつくってもらいました。素晴らしい曲ができて、後にアルバムにも入りました。

最初の年は750万円ぐらい使ったのですが、助成金がだんだん取れなくなってきます。でも、規模を小さく見せないために、地元でもともと行われているイベントとジョイントしました。モエレ沼公園で市民のソリ大会をやっているのは知っていますか？　とても面白いイベントで、そこにアーティストと参加したりもしました。

あとは、ここにないものをつくろうと考えました。ヒット企画は雪のカフェです。冬にモエレ沼公園に行って一番のストレスは食事するところや喫茶店がないことです。現場で作業をしていると、それはすごく思います。道工大(北海道工業大学。現・北海道科学大学)の建築科の学生がカフェをつくってくれたのですが、スキルがないので天井がだんだんと落ちてきて、危なくなってきたので、天井は抜きました。1杯500円で1日に100杯が売れて、あっという間になくなって、これは大ヒットでしたね。

次の年は、横浜から大きな空間をつくる西山仁というアーティストを呼んできて、骨組みを使ってドームをつくりました。雪まつりでは雪像の中に入ることが許されないということへのアンチテーゼとして、ここにドーム状の空間やカフェをつくったのです。5mを超える高さにもなりました。ただ、建築の構造として芯になる部分に鉄を使ったのですが、解体するときに雪に埋もれそうになりまして、これは危険だということで、翌年には木でつくることになりました(写真2-4)。これはうまくいきましたね。それから、寒いのでストーブを入れようという話になったのですが、雪の建物なのに熱を入れて大丈夫なのかといろいろと調べてみると、実はストーブをつけると構造が強くなることがわかりました。昼間に表面は解けますが、夜になると、それが固まってどんどん強くなるんです。それを繰り返していくと、すごく強いドームになるということが、いろいろな人への取材でわかりました。ここにもカフェをつくりました。

そのうち、冬にも雨が降るような年もあったので、無理して雪で天井をつくることもないのではないかと考え、テントにしてみました。これも雪まつりでは色をつけてはいけないということに対してのアンチテーゼでもあり、昼は色がついた空間をいくつも巡るというものですが、夜は、映像作家のニナ・フィッシャー &マロアン・エル・ザニと地元の建築家の赤坂真一郎さんとのコラボレーション企画により映像で演出されました。中からも外からも同じ透明度で映像が見えるというものでした(写真2-5)。

この企画はとても評判が良く、作品の写真が、ユネスコに札幌市がメディアアーツ都市として申請したときのホームページに、代表的な実績例としてずっと使われていましたね。

写真2-4　西山仁《Wintry Blasts 冬の突風》スノースケープモエレⅢ、2008年、モエレ沼公園　撮影:小牧寿里

写真2-5　映像:ニナ・フィッシャー &マロアン・エル・ザニ《10 sec. thinking about future》、建築:赤坂真一郎《テントビレッジプロジェクト2009》、スノースケープモエレⅣ、2009年、モエレ沼公園　撮影:小牧寿里

写真2-6　アイスギャラリープロジェクト、2006年、帯広駅北口多目的広場　写真提供:NPO法人S-AIR

写真2-7　ロイストン・タンによる創作映画上映、アイスギャラリープロジェクト、2006年、帯広駅北口多目的広場　写真提供:NPO法人S-AIR

写っている顔は、もともとニナ・フィッシャー &マロアン・エル・ザニが世界中で撮った人たち、それから、地元で撮ったスキージャンプの少年団です。一部がカフェになっています。小さなカップが500円でしたが、200杯があっという間に売り切れになりました。でも、ビールは全然売れませんでしたね。

帯広の駅前で行った「アイスギャラリープロジェクト」

柴田　もうひとつ、同じ冬でもほかのまちとの違いが見えるので、「アイスギャラリープロジェクト」を紹介します。「スノースケープモエレ」を行った翌年の2006年に、帯広でもアイスタウンフェスティバルという冬のお祭りをしているので、ジョイントしてほしいというオファーがありました。

帯広市は札幌市よりも人口が少ないのですが、積雪量は3分の1です。実際は雪がほとんどなくて、会場となった駅前は10cm積もっているぐらいでした。でも、1月の最低気温は、札幌が-7℃ですが、帯広市は-13.7℃ですので、2倍寒いんです。皆さんもご存じだと思いますが、帯広からはオリンピックのスピードスケートの選手がよく出ていますし、氷をつくるのに適した場所なんですね。

そこで、われわれが考えたコンセプトが「建築の幽霊」です。「透明な姿で、毎年同じ場所に現れ、常に姿を変え、1週間で消える」という建築のプロジェクトで、駅前で5年間続けました(写真2-6)。

まず1年目には、この寒いところに熱帯地方からアーティストを呼んでやりました。シンガポールの映画監督のロイストン・タンさんです(写真2-7)。皆さん、氷に映像が映ると思いますか?　実は、映らないんですよね。そこで、石灰水をかけて半透明の曇りガラスみたいなものをつくって映像作品を上映しました。また、沖縄の獅子舞も呼びました。冬に僕らは色を失うので、季節の違う人たちを連れてくると極彩色がそこに出てきて、面白い空間になるのではと、実験的なことをしたかったんです。ちなみに、沖縄の人たちは寒すぎて息ができないと言っていましたね(笑)。僕からはとりあえずこれで終わります。

漆崇博

1977年石狩市生まれ。一般社団法人AISプランニング代表理事。北海道内でのアーティスト・イン・スクール事業をはじめとするアートプロジェクトを中心に、さっぽろ天神山アートスタジオの管理運営、札幌国際芸術祭の事務局マネージメントなどに関わり、アートと社会をつなぐさまざまな企画運営・コーディネートを行う。

吉崎　柴田さん、ありがとうございました。「さっぽろ雪まつり」は観光イベントですし、人がたくさん来るということや全体のイメージがあって、やってはいけないことがたくさんあるのですね。しかしそれを打ち破ろうとすることが、新しい表現につながってきたと感じました。雪まつりとほかのアートイベントとの関係については後半でもう少し話を広げてみたいと思います。

漆崇博—アーティスト・イン・スクール、Sappore2 Project、s(k)now、さっぽろ垂氷まつり

雪国ならではの「アーティスト・イン・スクール」「Sapporo2 Project」

漆　漆と申します。私からは、冬にやっているアートプロジェクトと題して、いくつかタイプの違う事例を紹介します。

私は、北海道に生まれ育ちました。でも冬に何かをするという考えは、これまであんまりなかったんですね。学生時代は北海道を離れていたのですが、北海道に戻ったらやってみたいと構想していたのが、小学校にアーティストを連れていって、一定期間その土地に滞在しながら、アーティストが提案する創作活動を中心に、子どもたちや先生、地域の方々と交流して、小学校自体を違った場に変えていくという活動でした。北海道に戻ってきてすぐにお会いしたのが、実は隣にいる柴田さんでした。それが2004年です。そのとき、柴田さんと一緒にS-AIRで仕事をされていたのが小田井真美さんで、今回、アートとリサーチセンターというプロジェクトでアーカイブ展にも協力してくださっている方です。

そこで、小田井さんが、帯広の小学校にアーティストを連れていき、いろいろな活動をしていることを知って、私もぜひそれに参加したいと考えて、早速、帯広に行くことになりました。そこで自分がやってみたいと思っていたことが、この「アート・イン・スクール」ではじめて実現するんですが、その一番最初に関わった季節が、まさに冬だったんです。このときに来ていたのが、アーティストのKOSUGE1-16という方たちで、

今は高知在住ですが、もともと東京の小菅という場所に住んでいたユニットです(写真3-1)。
彼らが北海道に来て、小学校で何をしたいかという話になりました。札幌だと、冬はスキー授業をしていますよね。皆さんもウィンタースポーツの一環でスキーをする人が多いかもしれません。しかし、道東のほうは雪が少ないということもあって、スケートなんですよね。僕も大人になるまで知らなかったんですが、各小学校のグラウンドにとっても素敵なスケートリンクができるんですよね。それを見たとき、正直、感動しました。そこで、スケートリンクをメンテナンスしたり、つくるところからアーティストが学校に関わっていくということをしました。
このアーティストたちが提案したのは、「子どもたちからスケートを教えてもらう」というプロジェクトでした。自分たちが学校に行って何かを教えるのではなくて、そこにあるものをそこにいる人たちから教えてもらうという、交流を前提とした活動を数週間かけてやりました。これをきっかけに、私は「アート・イン・スクール」をずっと続けていますが、このときに、やっぱり本州や海外からのアーティストは、北海道に来ると冬とか雪とか氷とかっていう、季節の特徴的なものをヒントに何かをやってみようと思うんだな、ということを一番最初に体感させてもらいました。
その後、札幌に戻ってくると、「スノースケープモエレ」が始まります。私もスタッフのひとりとして、モエレ沼公園で受付をしたり、道や現場小屋みたいなものをつくってみんなでカップラーメンを食べながら、村づくりみたいなことをやりました。
先ほど柴田さんのお話の中にもありましたけれども、そこで中心的に活動をしていたのが、カミーユ・フェルシュフーレンさんというオランダのパブリックアートのプロジェクトをしているアーティストでした。彼は、モエレ沼公園で活動する中で「Sapporo2」というコンセプトを提唱しました。
札幌って、夏の都市の状況と冬の雪の状況というのが、まったく異なりますよね。雪が降っても通勤・通学に影響がないように、除雪機能などさまざまなものが発達はしていますが、例えば、雪が降ることによって隣近所との境界線がなくなってしまったり、道路だったところが道路ではなくなったり、空き地が真っ白なキャンバスになってしまったりします。そういう意味で、夏場とは全然違う、もうひとつの札幌みたいなものが、ある種のパラレルワールドのように、毎年必ず、冬に存在するわけです。これをひとつの文化資源と捉え、いろいろなことができるのではないか、いろいろな都市のあり方を発見できるのではないかというのがこの「Sapporo2」でした。「スノースケープモエレ」はあくまでも公園内で行う事業でしたが、このコンセプトをきっかけに、まちに出て、もう少し多面的に札幌を見ていこうというプロジェクトが生まれて、その後カミーユさんを中心とした何人かの発起人で「Sapporo2 Project」を行っていくことになります。
私は、このコンセプトにとても影響されまして、モエレ沼公園での経験も多少ありましたので、その後「アーティスト・イン・スクール」の中でも、毎年1回は必ず冬の取り組みを行っていくことになるんですね。
先ほど言いましたように、「アーティスト・イン・スクール」は、アーティストが数週間、毎日学校に通って、子どもたちや先生と一緒に考えたり何かをつくったりしつつ、状況を生み出していくのですが、例えば、野上裕之さんは、小学校の隣にある小さなポケットパークみたいなところにお城のような造形物をつくってくれました(写真3-2)。建築物なので最後は餅まきのセレモニーもやりました。このように、そこに関わる人たちと楽しみながら、ものをつくっていきます。
ただ、造形物をつくるにもいろいろな技術が必要で、これはスノースケープなどで培ったものが生かされていまして、つながっているわけです。
河田雅文さんは、「スノースケープモエレ」でリーダー的に指揮を振っていた方です。彼を小学校に連れていくと、小学校のグラウンドを見て、「ここに、冬の間にしかできない富士山をつくれないかな」と言い出しました。そこで、「つくってみますか!」という話になったんです。札幌の方はおわかりになると思うんですけど、冬場になると小学校のグラウンドにちょっとした雪山をつくって、スキー学習に行く前に1、2年生がトレーニングをしたりしますよね。この学校にもそうした雪山があったんですが、その雪山を土台にして、もっともっと大きい雪山をつくれないかという話になりました。
ラッキーなことに、隣接したところに除雪センターがあったので、そこに声をかけると、近隣の通学路や周辺の雪を持ってきてくれることになったんです。そうすると、意外と大きな雪山ができたので、それをすり鉢状に掘っていって、富士山の9合目から上くらいを再現して、最後はみんなでお鉢参りをして終わるというイベントをしようとしたんです。そうしたら、校長先生が、「富士山っていつ噴火するかがわからないんだぞ。今回は噴火しないのか?」みたいなことを言い出しまして(笑)。「噴火かー」と思ったんですが、これもたまたま近所に花火師さんが住んでいらっしゃいまして、学校のPTAの方がその方に協力してもらえないかと相談してくれたみたいで、なんと、冬に花火大会が行われるという結末になりました。噴火したということですね(写真3-3)。
今回の「さっぽろウインターチェンジ」でも除雪の展示をしていますが、札幌って、冬に社会インフラを機能させていくために、除雪にものすごい費用をかけているんですよね。しかし、その割にといいますか、市民からのクレームのトップも除雪なんです。ですから、除雪に従事されている方の苦労が報われない状態があったり、後継者不足などいろいろなことが叫ばれている部分があります。でもこのとき、この地区の除雪のクレームは激減したようで、除雪センターの方が非常に喜んでくださって、この除雪センターがこの地区にあった時代までは、実はこの活動は続いていました。今は移転したのですが、花火大会だけは今でも続いています。
その後、例えば、東方悠平さんと行った活動は、冬のグラウンドを夏のビーチにするというものです。雪で海の家をつくったりして、たくさんの保護者の方にも参加していただいています(写真3-4)。
また、富士翔太朗君の作品で言うと、雪を直接扱うのではなくて、360°、真っ白になる冬の状況の中に明かりの作品を仕込んで、360°のプラネタリウムのようなものをつくろうというものでした(写真3-5)。こういう雪の状況を逆手に取った作品もありました。
あるいは、雪景色の中だからこそ、ある種の情緒を持った作品ができると、ショートムービーを映画監督の片岡翔さんにつくってもらったりしました(写真3-6)。
また、山本耕一郎さんとは、学校の森の中に温泉郷をつくろうと、「目湯」とか「手湯」とか、子どもたちが考えたいろいろな種類の温泉をつくり、最終的に温泉街をみんなで巡っていくという活動もしました(写真3-7)。

写真3-1　帯広市立大正小学校×KUSUGE-16、2005年1月24日～2月4日、十勝アーティスト・イン・スクール事業

写真3-2　札幌市立山の手南小学校×野上裕之、2007年1月22日～2月2日、トヨタ・子どもアーティストの出会い事業

写真3-3　札幌市立新光小学校×河田雅文、2008年2月4日～15日、トヨタ・子どもアーティストの出会い事業

写真3-4　札幌市立北小学校×東方悠平、2010年2月8日～24日、おとどけアート事業

写真3-5　札幌市立常盤小学校×富士翔太朗、2011年1月19日～2月4日、おとどけアート事業

写真3-6　札幌市立旭小学校×片岡翔、2011年2月7日～19日、おとどけアート事業

写真3-7　札幌市立みどり小学校×山本耕一郎、2012年1月17日～2月3日、おとどけアート事業

写真3-8　札幌市立もみじの森小学校×小川智彦、2013年2月1日～15日、おとどけアート事業

写真3-9　札幌市立澄川南小学校×ミッシェル・アンジェリカ・カビルド、2018年1月22日・23日、2月1日～13日、おとどけアート事業、国際公募事業「s(k)now」の一環として実施

小学校での活動でとても興味深かったのが、例えば雪の壁をつくったりだとか、雪自体をパワフルに活用して造形をしていくやり方がある一方で、雪のことをちゃんと知っている地元出身のアーティストの中には、雪に抗うのではなく、雪の性質を受け入れながら、その瞬間瞬間を表現として活用していくタイプの作家も多くて、後半にはそういった手法がいろいろなかたちで試されたということです。例えば小川智彦さんは「スノーガーデニング」というものを提唱しています。雪というのは溶けてしまうし、とても儚いものでもあります。でも、雪が降ることによって、ある種、状況がリセットされるわけです。それを逆手に取って、小川さんはガーデニンググッズを開発し、新雪が降った後に、花や葉っぱのスタンプを押していくんですね(写真3-8)。その日1日は、それを愛でるといいますか、雪でつくったガーデニングを楽しむ。それが次の日、雪が降ったら、またリセットされて、また違った模様のガーデニングを楽しむというものを開発し、提唱した活動がありました。

海外アーティストを招聘する さっぽろ天神山アートスタジオでの「s(k)now」

漆　その後、「Sapporo2 Project」や「アーティスト・イン・スクール」のような活動をしていく中で、さっぽろ天神山アートスタジオという施設の運営にも関わることになりました。これは、アーティストの創作支援をする施設です。1回目の札幌国際芸術祭の開催年にオープンし、その後も引き続き運営させていただいていますが、今、国内外から年間400人くらいのアーティストが札幌に来て、いろいろな創作活動や研究・リサーチ活動などをしています。

ここで毎年、国際公募で年間2名から4名くらいのアーティストを招聘し、冬や雪や北方圏というキーワードをテーマに、札幌での創作活動を展開してもらっています。今日は時間があまりなくご紹介できませんので、ホームページや今回のアーカイブ展を見ていただければと思いますが、例えば、ベトナムという雪のない国から来たアーティストのミッシェル・アンジェリカ・カビルドさんは、雪そのものを扱うのではなく、道路の滑り止めの粉などを素材にして作品をつくってみたいという話をしていました。また、小学校の中庭にある、理科の水流の実験で使う池みたいなものをモティーフにして、そこに造形的なものを持ち込んで、冬にしか立ち上がることがないインスタレーションをやりました(写真3-9)。

今年は「s(k)now」という企画名がついていますが、さっぽろ天神山アートスタジオにベルギー、インド、カナダ、オーストラリアからアーティストが来て、冬のこの時期に創作活動をします。

札幌国際芸術祭から始まったSIAFラボ 「つららの研究成果を「さっぽろ垂氷まつり」で

漆　先ほど札幌国際芸術祭の話に少し触れましたが、最後にこの話をさせてもらいます。札幌国際芸術祭が2014年にスタートしましたが、3年に1度の芸術祭の間をつないでいき、芸術祭が開催しない年にも芸術祭に関心を持ってもらったり、芸術祭があることの意義を市民の皆さんと共有するための活動をやっていかなければならないのではないかということで、「SIAFラボ」という活動がスタートしました。

SIAFラボではいろいろなことをしているのですが、その中で冬をモティーフにした活動が2015年からスタートしています。「Bent Icicle Project」、通称「ツララボ」と呼んでいる活動ですが、「つららを曲げてみたい」というひとりのアーティストの発想から始まったプロジェクトです。皆さんが風景の中で見るつららにあえて執着し、そのつららを題材にさまざまな表現や札幌ならではの暮らしの可能性などをみんなで再認識、再発見しようというものです。

このプロジェクトは、最初につらら自体がどういう性質のものなのかを探るところからスタートしました。その後、つららと日常の生活との関係性はどうなっているのかを考えました。例えば、風景としてつららはどう見えるのか、建物とつららの関係はどうなっているのだろうという疑問から、今は、都市の環境とつららの関係性についての研究へと、活動の視点が広がってきています。

その研究のひとつの成果を見てもらう機会として、年に1回、2月に「さっぽろ垂氷(たるひ)まつり」というイベントを札幌市資料館(旧札幌控訴院)を会場に開催しています。例えば、つららを放射状につくることができるのかということを、つららの性質を踏まえて研究した結果、「回転式巨大氷柱(つらら)造形装置」を小町谷圭さんというメディアアーティストが生み出しました(写真3-10)。

また、縦長の冷蔵庫の中につららをつくれる仕組みをつくり、曲がった形など好きな形のつららをつくれるのではないかという実験もしてみました(写真3-11)。

また、先ほど環境という話をしましたけれども、例えば都市の温度や湿度、気圧などの環境データを入手して、そのデータから、光でつららを再現するという作品もつくりました。これは、「環境氷柱光壁」という名前のもので、カーテン状になっていて、色が変わっていくものです(写真3-12)。

つららが最もできやすい建物は何かを検証した結果、生み出された垂氷小屋もつくりました(写真3-13)。

さらに、単純に作品として追求していくだけではなく、つららのチョコレートをつくれないかとか、つららをモ

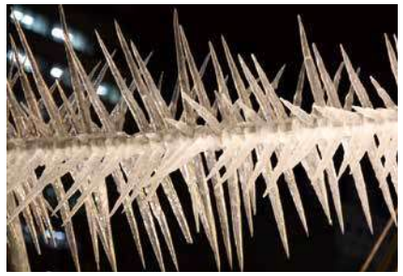


写真3-10　さっぽろ垂氷まつり2016《回転式巨大氷柱造形装置》2016年　写真提供：札幌国際芸術祭実行委員会

写真3-11　さっぽろ垂氷まつり2016《人工氷柱製造装置》2016年
写真提供：札幌国際芸術祭実行委員会

写真3-12　さっぽろ垂氷まつり2018《環境氷柱光壁》2018年
写真提供：札幌国際芸術祭実行委員会

写真3-13　さっぽろ垂氷まつり2017《垂氷小屋》2017年
写真提供：札幌国際芸術祭実行委員会

ティーフにしたアクセサリーをつくれないかなど、つららひとつでもいろいろなチャンネルをつくって、市民や専門家の方に関わってもらうような活動をしています。まさに昨日から「さっぽろ垂氷まつり」を札幌市資料館で開催しており、この「さっぽろウインターチェンジ」との連携の中でもご案内させてもらっています。かれこれ4年間の活動になりましたけれども、その成果を皆さんにも見ていただけたらうれしいなと思っています。

吉崎　ありがとうございました。つららの研究が多様な表現につながっていくことを毎年楽しみにしています。除雪の話もありましたが、これ以外にも除雪とアートとのつながりを探るいろいろな取り組みもありますので、それは後ほどご紹介したいと思います。

今村育子―さっぽろユキテラス

「さっぽろユキテラス」のキーワードは
「雪と光」

今村　札幌駅前通地区活性化委員会事務局の札幌駅前通まちづくり株式会社の今村と申します。「さっぽろユキテラス」を担当しております。よろしくお願いします。

「さっぽろユキテラス」は、北海道庁旧本庁舎の前にある札幌市北3条広場（アカプラ）で開催しています（写真4-1）。雪と光をモティーフにした、札幌の冬の魅力を発見するプロジェクトとして2015年2月から開催していて、毎年2万人から3万人くらいの人が訪れているイベントです。札幌の人にとって、雪は厄介者だと言われています。お金もかかりますし。しかし、資源として見れば、このまちならではのものであり、その資源をアーティストの創造力で魅力的に演出して、サイトスペシフィックな体験を提供していくプロジェクトです。

先ほど長い名前を言いましたが、主催しているのが札幌駅前通地区活性化委員会です。この札幌駅前通のエリアのビジネスパーソンや来場者が楽しく快適に過ごせるように、賑わい創出に取り組んでいます。沿道企業も参加してのんど自慢大会や、「エキヒロカフェ」という駅の広場のオープンカフェ、パフォーマンスイベントを実施するほか、イルミネーションも行っています。また、300名くらいの市民ボランティアと一緒に、「フラワーカーペット」という花を使ったイベントも行っています。さらに、生演奏で盆踊りを踊る「さっぽろ八月祭」というお祭りがあるのですが、札幌国際芸術祭2014で実施した「フェスティバルFUKUSHIMA! 北3条広場で盆踊り」を引き継いで、札幌駅前通地区のお祭りとして開催しているもので、毎回大盛り上がりです。こういったことを、札幌市や沿道企業さん、それに当社でお金や知恵を出し合いながら、物事を進めやすくするための委員会です。その事務局を務める札幌駅前通まちづくり株式会社は、札幌駅前通地下広場（チ・カ・ホ）の広場部分と先ほどのアカプラの両方を運営しています。

話は戻りまして、「さっぽろユキテラス」についてです。誕生したのが2015年。札幌市は2013年にユネスコ創造都市ネットワークにメディアアーツ都市として加盟したのですが、その創造都市の担当の方から、メディアアートの催しをやりたいと、当社に相談がありました。当社としてもちょうどアカプラの運営を預かった年で、冬の催しを検討していたタイミングだったので、面白いことをやれたらいいね、ということから話が始まりました。

当社は、いろいろなところから話が来て、それをみんなで膨らませて実施するという仕組みが多いのですが、このプロジェクトもそういうスタートで、最初は沿道企業と一緒に会議をしたりしていました。そこで話し合ったところ、札幌の資源である雪をアーティストの力で創造的に解釈してもらおうということと、とはいえ雪の中という難しい条件なので、メディアアートというとどうしても電気や繊細な機器を使うことが多くなるため、そこまで限定せず解釈を広げて、さまざまな表現を受け入れられるように「雪と光」というキーワードを決めました。

初回は、シンプルに雪を見ることにしようと、北海道の開拓のシンボルともいえる五陵星をモティーフにして光の柱を立ち上げる《フロンティアスター》という作品を、大黒淳一さんにつくってもらいました（写真4-2）。また、インタラクティブな雪遊びができるものとして、雪を掘るとその深さを感知して映像が変わる仕組みの作品も提案しました。

2年目は2016年です。プロジェクトを続けていくときには、前年の反省などをもとに更新していこうとします。前年の作品は雪の美しさを見るというアイデアはよかったし、すごくきれいだねと皆さんに言っていただけたんですけれども、夜間のみの開催だと昼間は機械が置いてあるだけになってしまうのでもったいないという結論に至り、映像が昼間も見えるようにするために、かまくらをつくることにしました。

水内貴英さんの作品《Layer of lights》は、蓄光スプレーをかまくらの内側の雪の壁に吹きかけ、中にブラックライトが仕込んであって発光します（写真4-3）。また、志村信裕さんの作品《Jewel》では、かまくらの中を真っ暗にして映像インスタレーション作品を展示していただきました（写真4-4）。さらに、夜も楽しんでいただきたいということで、高橋匡太さんにかまくらを惑星に見立てた光の演出《Snow Planets》を制作していただきました（写真4-5）。この年から海外のメディアアーツ都市との交流プログラムが始まり、フランスのアンギャン・レ・バンからアーティストを招聘し、次の年は光州から招聘しています。

3年目は、かまくらと屋外の作品とを展開していきました。このときの印象的だった作品を紹介したいと思います。こちらは、八木良太さんの《Vinyl》という作品です（写真4-6）。プレーヤーの上に乗っているのは氷のレコードで、針を落とすと、ふにゃふにゃした音楽が

写真4-1　さっぽろユキテラス、2019年　撮影：藤倉翼

写真4-2　大黒淳一《フロンティアスター》2015年
撮影：株式会社アンドボーダー

写真4-3　水内貴英《Layer of lights》2016年　撮影：小牧寿里

写真4-4　志村信裕《Jewel》2016年　撮影：小牧寿里

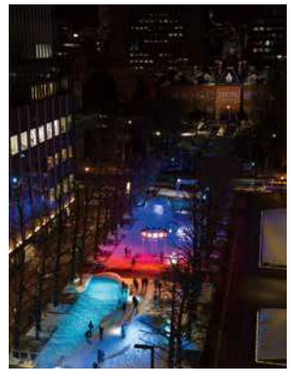


写真4-5
高橋匡太
《Snow Planets》
2016年
撮影：小牧寿里

今村育子

1978年札幌市生まれ。2006年より美術家としてインスタレーション作品を制作し、国内外で展示を行う。2011年より札幌駅前通まちづくり株式会社へ入社し、主に「シンクスクール」「PARC」「さっぽろユキテラス」「テラス計画」「まちのこそだて研究所gurumi」の企画や、まち会社主催事業のデザインを担当している。

流れます。会場にシリコン型を置いて、水を入れて一晩経つと氷のレコードができるので、それを次の日にかけるというものです。これは、八木さんの過去作なのですが、ユキテラスにぴったりだと考え、再制作をお願いしました。

こちらは久門剛史さんの《PAUSE #3》です(写真4-7)。月をイメージした光の輪の作品で、こちらも過去作なのですが、雪の壁に映すことで、通常の壁とは違うディテールが見えてきて、雪の美しさを私たちに気づかせてくれます。このように、ユキテラスの環境に合わせて、見せる作品を選んでいく展開もあり、どんどん面白くなっていくと感じました。

4年目の2018年です。ここはビル風がすごいので、それに耐えるために骨が厳重に入っていて、かまくらの施工にお金がすごくかかるんです。それをどうにかしたいなと、この年は雪山状にして、ひとつのボリュームでいろいろな見せ方ができないかと考えました。

このときもオースラリアのメディアアーツ都市のリンツからドマス・シュヴァルツさんというアーティストを招聘していました。《Wachstropf》は、温めた蠟に電球をつけることによって、蠟が溶けて、引き上げることによって、つらら状のものができるというものです(写真4-8)。

会田大也さんの作品《使い方を考えるスピーカー》は、雪山の上で話した言葉がループしていき、下のスピーカーから出てくるというものです。タイムラグがあるし、いろいろな人の声が混ざってダイレクトに聞こえない、その不自由さが想像力を生み出すのではという雪遊びのひとつを提案していただきました(写真4-9)。

そして5回目となる今回は、屋根のない美術館をつくります。雪や氷を用いた美術館「スノーミュージアム」は、建築家の五十嵐淳さんが設計して、その中に国内外で活躍するアーティストの作品を展示しています。

昨日テストをした段階ですが、外側には屋外インスタレーションとして小金沢健人さんの作品があって、内側には今村遼佑さん、タムラサトルさん、山内祥太さん。会田大也さんは昨年も出展していますが、今年は1年間かけてリサーチするプロジェクトのスタートアップのパネルを展示します。内容としては、雪のない国の人たちの声を聞き集めて、それを作品化し、雪に対するポジティブな意見を私たちも共有しようというものです。

屋外にはラップランド大学デザイン学部の方と北海道大学がコラボレーションした雪の光るオブジェが登場し、フィンランドとつながるインタラクティブな仕組みを設営中で、どうなるかなというところです。そのような感じで、明日から2月11日まで開催しておりますので、ぜひお越しいただきたいと思います。

写真4-6　八木良太《Vinyl》2017年
撮影：株式会社ハレバレシャシン

写真4-7　久門剛史《PAUSE #3》2017年
撮影：株式会社ハレバレシャシン

写真4-8　ドマス・シュヴァルツ《Wachstropf》2018年
撮影：Barry Ashworth

写真4-9　会田大也《使い方を考えるスピーカー》2018年
撮影：Barry Ashworth

全体討議

さっぽろ雪まつりとアート表現

吉崎　皆さんも冬に対するアートによるいろいろなアプローチがあることを改めて感じられたのではないかと思います。これから全員で話し合っていきたいのですが、最初に取り上げたいと思ったのは、「さっぽろ雪まつり」との関係です。やはり冬のイベントと言いましたら「さっぽろ雪まつり」が、どうしても意識せざるを得ないとても大きな存在として君臨しています。アート表現として、その中での展開を考えるか、あるいは対峙してまったく別のことを行うかなど、いろいろなあり方が存在すると思います。

雪まつりの雪像はとても精巧につくられており、多くの人を楽しませてくれていますが、調べてみると、いろいろなアーティストが自分の表現としてそこに入り込んだ事例がいくつもあるのです。まず1980年に、岡本太郎が高さ10mくらいの大きな「雪の女神」という雪像のデザインをしています(写真5-1)。また、雪像へのプロジェクションマッピングは2013年から本格的に行われ、新しい雪まつりの魅力として人気を博していますが、それよりも早い1998年から5年間にわたり、古幡靖さんという札幌在住のアーティストが、7丁目のHBC広場で、雪まつりの公開時間が過ぎた22時から約30分間、雪像に映像作品を映すことを行っていました。

さらに、先ほど「Sapporo2 Project」の話がありましたが、そのコンセプトに基づいて、雪まつりの国際雪像コンクールに正式参加したオランダチームが行った内容も、とても興味深いものでした。各参加チームには3m四方の立方体が与えられ、普通はそれを彫り進んで雪像をつくるのですが、彼らはそれを小さなブロックに切り刻んで、リボンをつけて、道行く人たちにプレゼントしていき、最後は何もなくなってしまうというものでした。その行為自体を作品として提示したのです(写真5-2)。

それから記憶に新しいところでは、「トット商店街」があります。これは札幌国際芸術祭2017の公式プログラムとして開催されたものですが、黒柳徹子さんをかたどった雪像付近で岸野雄一さんが影絵やお芝居を1日何公演も行うという新しい表現でした(写真5-3)。

これらを見ていくと、雪まつり自体も雪像を鑑賞するだけではない新しいアート表現の場になり得ると言えると思います。また、去年の入場者が254万人だったことを考えると、作品を見る人の数が圧倒的なものであることも見逃せない点です。

しかし、逆に「さっぽろ雪まつり」へのアンチテーゼとしてのアートプロジェクトもあります。「スノースケープモエレ」もそうした発想からスタートしたと先ほどお話がありましたが、2008年にPRAHA2+deep Sapporoで行われた「カナコ雪造カンパニー」も、同様の考えにより始められたものです(写真5-4)。このプロジェクトは若いアーティストたちが住宅街などで行ったものです。先日、これに関わった方にインタビューしたので

写真5-1　岡本太郎デザインによる《雪の女神》1980年
写真提供：さっぽろ雪まつり実行委員会

写真5-2　TeamHollandによる国際雪像コンクールの正式参加、2010年　©Sapporo2 Project

写真5-3　「トット商店街」、2017年
写真提供：札幌国際芸術祭実行委員会

写真5-4　カナコ雪像カンパニー、除雪原風景のオマージュ、2008年、PRAHA2+deep sapporoほか　撮影・写真提供：小牧寿里

写真5-5　除雪車のオペレーターとアーティストとで雪のドローイングをする　第2回アーティストによるもうひとつの雪まつり、2010年、リンケージプラザ、札幌　©Sapporo2 Project

写真5-6　高橋喜代史《ガガガ》第1回アーティストによるもうひとつの雪まつり、2009年、リンケージプラザ、札幌　©Sapporo2 Project

写真5-7　熊澤桂子《にんじんの塔》ウィンターサーカスvol.4、2009年、上富良野、深山峠会場　撮影・写真提供：菊地晴夫

写真5-8　「ウィンターサーカス」では、雪が溶けてなくなるまでを定点で記録。「太陽の彫刻」と呼び、人がつくった造形が春に向けて次第に形を変えていくさまも楽しんだ　撮影・写真提供：菊地晴夫

すが、はっきりと雪まつりに対するアンチテーゼとして行ったと言っていました。雪まつりの雪像の表面に使う「化粧雪」と呼ばれる真っ白な雪は、中山峠あたりから運んでくるのだけれども、雪は家の周りもいっぱいある。それらは生活のために除雪しなければならないのですが、そのことをアート表現に結び付けられないかというところから始まったということでした。ですから、巨大な存在の雪まつりがあるからこそ、その反発からまた違う表現もたくさん生み出されているとも言えるのです。

除雪をアートに

柴田　「カナコ雪造カンパニー」は、除雪という行為自体をアートとして見るという概念ですよね。だから、小さいとか大きい、美しい、そういうことは関係なく、行為を意識して除雪するということです。アーティストが除雪をするとどうなるか、という発想は面白かったですね。

吉崎　今2階で開催している展示も除雪に対する興味が出発点になっていますが、除雪関係のアート表現でほかに何か知っているものはありますか。

漆　「Sapporo2 Project」でカミーユさんたちと一緒にやっていて面白かったのは、除雪行為をちょっとはみ出したような除雪行為です。例えば、普段空き地になっているところや巨大な駐車場も、雪が降ると単純に雪が積もっているだけの場所になることが多いわけですよね。そこにショートカットできるような道をつくってみたり、そんなことをゲリラ的にやっていました。

あとは、今回2階の会場で除雪についての解説展示もありますが、札幌というまちが積み上げてきた冬を乗り越えるためのさまざまなノウハウのようなものが、ある種象徴的に見えるのが、あのような除雪の仕組みや重機なのです。それを今度は、造形したり、表現する素材や道具として使えないかということで、除雪車を使って雪にドローイングすることを2010年に広大な敷地の中でやってみたりといった実験もしましたね(写真5-5)。3台ぐらい違うタイプの除雪車を、ある除雪を担っている会社の方が持ってきてくれたのです。除雪車は、ただ運転したり、作業する技術だけではなく、オペレーターのセンスや経験値や技術がとても必要で、オペレーションする人と操作する人のふたりがいて成り立つものなんです。僕は、当時はそういうことを知らなかったので、すごく面白かったですね。でも、なかなか外に発信しにくいというか、伝えづらいものだとも思います。

柴田　カミーユさんの話で思い出したのですけれども、「スノースケープモエレ」の初年度にも除雪車を使っていました。カミーユさんは都市計画系の人で、モエレ沼公園の雪原にまちをつくりたいと言って、公園の奥に作品をつくったものだから、そこまで行く道をつくらなければならなくなりました。たぶん1kmくらいあったかもしれませんが、その道をつくるために、市街を除雪している巨大な除雪車をモエレ沼公園内に誘導して、除雪してもらったんです。何もない雪原を除雪車が走ってくるのはとても格好よかったですね。そこで、ロータリーやホイールローダーという車種を覚えました。あの車自体がアートだし、観光資源になるのではと思いましたね。

吉崎　今回の「さっぽろウインターチェンジ」のチラシの表紙が除雪機のイラストになっています。冬以外は使わない除雪機を何百台も保管している場所にスタッフが見学に行ったのですが、みんな「かっこいい、すごくわくわくする」と口を揃えて言っていました。

漆　これは高橋喜代史さんの《ガガガ》(写真5-6)という擬音の作品なんですが、そこに上ると、裏が除雪センターになっていて、2、30台の重機が並んでいるのが見えるんです。雪が降ると出動するのでいなくなってしまうのですが、雪が降っていない時間帯は、除雪車が並んで停まっているので、それをそのまま「Sapporo2 Project」の展示会場で見せることができました。

冬のプロジェクトの難しさ

吉崎　もうひとつ、皆さんに紹介したいのが、「シーニックバイウェイ北海道 大雪・富良野ルート」という旭川から大雪までの道沿いのまちで行われていた「ウィンターサーカス」というプロジェクトです(写真5-7)。これは、アーティストたちがドローイングなどでデザイン案を提示し、それぞれのまちや村の人たちが、その中からつくりたいものを選び、自分たちで制作するというものです。そして、できあがった雪像に映像を映したり、会場で温かい飲み物を提供するようなお祭りを2日間行うのですが、その後も雪像を取り壊さずにそのまま置いておき、溶けてなくなるまでの形の変化を楽しみながら春を待つというプロジェクトでした(写真5-8)。

地域の人たちを巻き込んだとても興味深いものだと思うのですが、2006年からの10年で終わってしまいました。先ほどの「スノースケープモエレ」もとても先進的だったのですが、7回で終わってしまったように、こうした冬のアートプロジェクトは、継続することの難しさがあります。

「スノースケープモエレ」をやめてしまった一番の問題というのはやっぱり経費面だったのでしょうか。

柴田　「スノースケープモエレ」は、主催が札幌市公園緑化協会で、僕たちも仕事として関わっていました。最初は助成金が多かったのですが、だんだんと取れなくなっていき、お金がなくなってきたのでストップしたという状況ですね。ただ正直に言うと、やめたとは言っていなくて、フェードアウトしていったという感じです。

「ウィンターサーカス」には僕も呼んでもらい、行ったことがあるのですが、すごく大変だなと思いました。まちづくりのようなボランティアベースの活動で、地元の人たちの「仕事を休んででもやりたい」という気持ちで実現しています。しかも札幌と比べて、ものすごく寒いところが多い。それを乗り越えてでも実現するという気持ちをつくるのがすごく大変だと感じました。

吉崎　もともと10年を目標で始めたそうなのですが、冬はどうしても集客が思うようにできなかったり、悪天候の関係で人が来ない場合もあります。何週間もかけてつくった労力と、それを見てくれる人の数との関係で心が折れてしまうこともあったと、企画を中心で動かしていた方がインタビューで正直にお話しされていました。

漆さんは、冬ならではの苦労や大変さは、どのあたりに感じていますか。

漆　やっぱり自然現象ではないでしょうか。特に雪や氷という、人間の力ではどうしようもならない、非常に大きな自然の摂理に寄り添ってやっていくようなタイプのプロジェクトとなると、先が読めません。明日雪が降るかどうかは誰にもわからないんです。ある程度予

測はできたとしても、よくも悪くも翻弄されるところがあります。どうにもならないけれども、どうにかしたいというところが、大きくありますよね。
でも、北海道や札幌でしかできないものだからと、そういう不都合なところもポジティブに、都合よく言い訳にしてみたりもできます。実験であり続けられるというか、完成された何かにしなければならないということではなくなるんです。例えば、イベントで何かを表現しないといけないとなると、完成した何かを提示しなければならないという強迫観念が、美術作品においてもあると思うんですが、雪や氷や冬を題材にすると、いつまでも実験の域を越えられないというところに良さがあるし、思ったとおりにいかないからこそ続けられるんだと思います。
ただ、イベントとしてやるということで言うと、続かないのもわかります。それは、集客やお金が絡んでくればくるほど、規模が大きくなればなるほど、それを維持することが難しいからです。そもそも、どうなるかがわからないものを扱っているわけですからね。そういう怖さはやっぱりありますよね。リスクを伴うことが前提なので、続かないものが出てくるのは、致し方ない部分があるのかなと思います。

吉崎　今村さん、冬の難しさや課題についてはいかがですか。

今村　難しさはいくつもあります。やっぱり、雪は得体が知れなくて、扱い切れないんです。先ほども話されていたとおりで、リスクとコストの関係がすごく重要だと思っています。
当然、そこに作品を展示するわけですから、どうやって作品をインストールできるかについてもみんなの知恵を絞って、たくさんやりとりをすることになります。室内でやるものとは比べものにならないくらい、プラン変更や細かい調整が必要になってきます。

吉崎　今回何人かにインタビューする中で皆さんがおっしゃっていたのは、作業の苛酷さです。夏とは比べものにならないのはもちろんですが、労力の不平等さみたいなことも含め、いろいろと大変だったと語っていました。

漆　例えば、「さっぽろ垂氷まつり」だと、高さ5mくらいの光壁みたいなものをつくっています。つくり方はまだ開発中なのですが、メディアアート的なデジタル技術を結集した作品をつくっている割には、高さ5mの足場の上でひたすら半田付けをするとか、ノートパソコンを持ち込んでプログラミングするなど、超アナログな作業がその裏にたくさんあります。しかも、それが屋外の高さ5mのところで数時間にわたって展開されるとなると、非常に苛酷だなという感じはしますよね。これを醍醐味と言っていいのかはわかりませんけれども、そういう苦労は確かにあります。

柴田　僕は、モエレ沼公園の現場で、2回ぐらい遭難者を出しそうになりました。1年目は特に苛酷で、すごく雪が多い年で、一晩で1m降ったときもありました。学生ばかりだったのですが、中には夜中じゅう仕事をする者もいたので、助けに行こうとしたら、中型の除雪機も雪原の中で動かなくなってしまったことがありました。
だから、モエレ沼公園で作業をしていても、だんだんと登山に行くような感覚になっていきましたね。その結果、ゲストとして登山家や冒険スキーヤーやヒマラヤを登った人ばかりを呼ぶようになって、「極地芸術」というジャンルがあるのではないかと考えたりもしていました。

吉崎　モエレ山を使ったプロジェクトでも、大変なことがありましたよね。

柴田　僕は、アートプロジェクトを20年もやっているんですが、僕がやったイベントでは、1回も雨に見舞われたことがありません。だから自分は究極の晴れ男だと自認しています(笑)。しかし、1度だけ猛吹雪になったことがありました。それがこの《line dot line》というイベントです(写真5-9)。
あるとき、児玉毅さんという、プロの冒険スキーヤーの方が、「手伝いたい、何かできることはないか」とプレゼンをしてくれたんです。世界中の、まだ誰も滑っていないところを滑るような方です。それで、その方と組んで何かをやろうということになり、映像クリエイターの小池晋君にも頼んで、スキーヤーとアーティストのコラボレーションをすることにしました。モエレ山にジャンプ台をつくり、アクロバットスキーのチームが滑り下りてくるところにプロジェクターで映像を投影し、その軌跡を同時に映像で描くというものです。スキーヤーをリフトのように何度も上まで運んでもらうことを知り合いのスノーモービルのチームにも頼みました。そのために公園内を走行する特別の許可も取りました。最終的に5台のスノーモービルと、1日借りたら30万円くらいするような10,000ルーメンのプロジェクターを2台、それに、スキーチームで7人くらいを揃えての大掛かりなものになったのですが、イベント当日に猛吹雪になってしまいました。もう、命に関わるくらいの猛吹雪で、それでもスキーヤーは滑ってくれたのですが、やはり映像は見えなくて、ああいう感じになってしまったんです。このときはさすがに、冬のイベントは夏のものとは違うなと実感しました。これは、山の神に触れたと思いましたね。人工の山だけれども、イベントが終わったら何事もなかったかのように月が出ました。その2時間だけ、ものすごかったんです。何かがいるのかもしれないですね。何かの神の逆鱗に触れたのでしょうか。

写真5-9　出演：児玉毅、スノースポーツミーティング実行委員会、映像：小池晋、音楽：invisible Future《line dot line》、スノースケープモエレⅣ、2009年、モエレ沼公園　撮影：小牧寿里

吉崎　1回目の札幌国際芸術祭のときもモエレ沼公園でのイベントで悪天候で中止になったものがありましたね。ここで何かイベントをしようと思ったらこのようなことがあるのですね。

柴田　でもいつかリベンジしたいとも思っています。

吉崎　僕も今、このお話を聞いて、よい条件の中でぜひ見てみたいと思いました。何かの機会にリベンジですね。

冬のプロジェクトの可能性

吉崎　ここまではネガティブな話が多かったのですが、これからのことも含め、北海道、札幌で冬の可能性、魅力についてぜひお話しいただければと思います。
今村さんは、今回も少し傾向を変えているとのことですが、こんなことができるのではないか、こんな風にしてみたい、というお考えがあればお話しいただけないでしょうか。

今村　はい。「さっぽろユキテラス」では、なるべく雪や氷など、この土地ならではのものを使ってつくっていけるようになればいいかなと思っていまして、年々、そういうものが増えてきています。道外のアーティストには雪をはじめて触るような方も多いのですが、アーティストが雪に対してアプローチできるようにと思っています。今回も雪を使った作品がふたつありますし、ここではないとできないことをやろうとしてくれている方が増えているので、これはもっとやっていきたいと思っています。

漆　今日はいくつかのプロジェクトの話をさせていただきましたが、札幌に雪や冬があって、等しくみんなに、平等に雪が降るわけです。これはいいこともあれば、雪で人が死んでしまったりだとか、ネガティブなこととも隣り合わせです。みんなに危険の可能性がある。でも、そういう現象が年に1回、必ず起きるということ自体を、すごく大事にすべきことなのかなと思っています。
例えば、家の前の除雪をすることによって、年に数回しか顔を合わせない近所の人たちと挨拶ができることに喜びがあったりします。今の時代、そういうことも雪がないとないわけですよね。
僕らがやる活動、僕らが展開するものは、新しいものや見たことのないものを生み出していくのだと思うんですが、それと同時に、日常に雪があること、冬があることが自分の暮らしにどう関わっていて、それが実は、ネガティブなこともたくさんあるけれども、ある種の豊かさをもたらしているんだというころに気づけるようなものを、企画したりマネジメントしたりする立場として、社会と接続する立場として、ひとりでも多くの人に考えてもらえたらうれしいなと思います。

柴田　僕が冬のアートプロジェクトを実施したのは、まず情報に興味を持ったからだとさきほどお話ししたのですが、これは今も変わっていません。最近、海外の方にレクチャーをすることがあります。最初は、ラップランド大学の先生たちからの希望があって、北大でレクチャーをしました。彼らも同じような冬の文化を持っていると思っていたのですが、話を聞いてみると、

「私たちは氷は自然のものを使う、人工のものを使うなんて邪道だ」と言うのですが、一方で、雪は降雪機でつくっているようなんです。雪がないんです。「雪があっていいね、本物の雪でやってみたい」と言うんです。同じ冬のものでもそういう違いがあるんだなと思いました。

それから、去年、上海の芸術大学のパブリックアートコースで授業をしてほしいといわれ、レクチャーを行ったんですが、やっぱり中国の方たちは、北海道の冬にものすごく憧れを持っています。ですから、メイド・イン・サッポロの冬のアート情報をつくるというのは、もっと意識的に、自覚してやるべきだと思います。海外でのニーズがものすごくあるということです。

「SNOW SHOW」が過去に1回だけ開催されて、そのとき、世界で1万数千媒体に載ったという話をしましたけれども、なぜかというと、ライバルがいないからです。秋に芸術祭を開催するとなると、同じような時期に世界中を探せば100個くらいあるのではないでしょうか。ところが、冬の大型芸術祭はひとつもありません。つまり、そこに情報のすき間があるんです。それも、世界でシェアできるぐらい稀有な情報です。ですから、ものをつくるというより、情報をつくるというような意識があると面白いと僕は思います。

雪に抗わない北海道のアーティストたち

吉崎　ありがとうございます。先ほど漆さんが話された、地元のアーティストと道外から来た人だと雪に対する取り組み方が違う、地元のアーティストは雪に抗わず行う傾向があるということにとても共感しました。例えば、澁谷俊彦さんによる「Snow Pallet Project」もまさしくそうです。根雪になる前にいくつものオブジェを設置するのですが、その下向きの面には色とりどりの蛍光色が塗られています。そして、冬の間まったく手を加えずに雪が積もったままにして、その時々の雪の形の中での色の反射を楽しむという作品です。日々どのように変化しているかを見るのが楽しみになるという、冬に対する見方を変えてくれる作品だと思います(写真5-10)。

また、東海大学芸術工学部による「DESIGN with SNOW プロジェクト」でも同様に、ひと冬、屋外に棚状のオブジェを設置し、そこへの雪の積もり方や変化を愛でるような作品を試みています(写真5-11)。雪の降り方や溶け方、日光の当たり具合や風向きなどさまざまな条件によって、驚くほど多彩な形が現れるのです。こうした発想にみられるように、雪には苦労させられているのだけれども、雪を楽しみに転化させる方法も知っているというところが、雪国に暮らす人の感性であり、強みだと思います。

漆　最近、さっぽろ天神山アートスタジオという海外からアーティストがよく来る施設の運営をしているからでしょうか、どんな格好をして行ったらいいかとか、どんな状況なのかとよく聞かれるんですね。どんなダウンを着ていった方がいいのか、靴は溝つきのものがいいのかスパイクがいいのかとか、そういうことなのですけれども、僕らが普段から、そういうことを意識して生活しているかというと、そうでもないなと思います。とりあえず、寒くなってきたからそろそろ冬物を出そうかということはあったとしても、ここで暮らしている人たちはどこかで諦めているというか、受け入れているというか、そういうものだと思っているように思います。でも、外から来る人は対策を練るわけです。その違いです。それが非常に面白い。

写真5-10　澁谷俊彦《Snow Pallet 10》2017年、ホテル札幌ガーデンパレス　写真提供：澁谷俊彦

写真5-11　東海大学芸術工学部 DESIGN with SNOW プロジェクト《SNOW FALL／いとなみ》2008/2009年、札幌芸術の森美術館中庭　写真提供：札幌芸術の森美術館

それこそ、澁谷さんの作品、あるいは、東海大学の作品ももちろんそうですけれども、現象をどう逆手に取るのか、自然美と共にその現象に自分のアイデアや発想を加えることで、どのように違う視点をもたらせるか、というところに意識が向いていますよね。雪を知っているだけに。

また、危険なものにつながったり、人が死んだりというネガティブなものもあるという存在だということを、地元の人は知っているから、抗うことに対してはどこか慎重な部分があるのかなという気がしています。

吉崎　ここで会場からのご質問を受け付けしたいと思います。何かお聞きになりたいことがありましたら手を挙げていただけますでしょうか。

来場者　本日は、大変興味深いお話をありがとうございました。先ほど、かけた労力と集客が見合わないというお話がありました。「スノースケープモエレ」などでの来場してくれるお客様について質問があります。雪のプロジェクトといっても、地元の人は、寒いから嫌だという方もいらっしゃるのではないかと思うのですが、年齢層、あるいは、家族連れが多いのでしょうか。また、外から来る人が多く、地元の人が少ないなどについても教えていただければと思います。

柴田　「スノースケープモエレ」は、はじめはカウントの仕方がよくわからなかったのですが、4、5日で1万人くらいは入りました。

これは、始めてみてわかったのですが、実は、あの山がものすごく人を集めるんです。あれぐらいの山は登れますし、滑りやすいから、皆さん家族連れでソリやスキーをしに来ます。そこで、その層を誘導するという感じの企画構成にだんだんと変わっていきました。

また、それをベースにしつつ、マニア向けのものも加えました。例えば雪原でのキャンプのようなものをやると、海外の方は結構参加しますね。また、東京から大学の先生が来たということもありました。コンテンツで来る人が違いましたね。全体の層からすると、ファミリーが7割くらいです。2割がアート系の人で、1割が観光客みたいな感じでした。

吉崎　ほかにございませんか。先ほど作品を紹介させていただいた澁谷俊彦さんが会場にいらしています。お話しいただけませんか。

澁谷俊彦氏　冬のアートプロジェクトにアーティストとして参加する側として、抗うことなく、寄りそうように、ということですけれども、今年は気候変動の表れでしょうか、雪が少なくて苦労しています。今、六花亭の前庭で展示をしているのですが、天板の上に雪がほとんどなく、一度固まった氷が粉々に砕けた状態で天端の上に乗っかっている状態です。その自然現象をどうも解析できないでいるのです。自然をコントロールできないわれわれが、自然に対して、つい何でも克服できると思いがちな生活をしている中で、もう一度原点というか、謙虚な一人間としてのあるべき人と自然との関係、立ち位置を再認識させられるような経験を毎年しています。

また、先ほど除雪機の話がありましたが、ササラ電車も人気があります。除雪しないと車が往来できないのと同様に、レールの上の雪をかき出さないと市電が走れないわけです。細い竹を集めてつくられたササラはとてもアナログなものですが、その竹という素材が鉄のレールを傷めないのです。ハイテクであり、ローテクであるという象徴のように思います。市民にも非常に人気があって、子どもが手を振ると運転士さんが手を振り返してくれます。私の自宅が市電の沿線なので、そういう状況を昨日、今日と見ていると、そういったデジタルとアナログの必然的融合や双方向な関係というものがアートと関われたら面白いなと思っています。自分の作品とは別の切り口で新たな視点を見出せそうな気がしています。

吉崎　ありがとうございます。皆さん、最後に言い残したことはありませんか。

漆　これまで、柴田さんたちが始めたことに対して、継承されているものや、つながりみたいなものはあったのですが、今回のように「冬とは何だろう」というようなことを、みんなで考えていく機会があまりありませんでした。そういう意味では、札幌市民交流プラザでこういう機会が持てたこと、「さっぽろウインターチェンジ」のような事業があって連携できたことは良かったと思います。今回アーカイブ展で取り上げたイベントや団体でも、活動を続けているところはあるかもしれませんし、柴田さんが先ほど言ったように、「スノースケープモエレ」は、今はイベントとしての形は取っていませんが、そのコンセプトや考え方はまだ残っていて、それを伝える役割を果たしているという点では続いている

と言えると思うんです。そういう人たちはまだたくさんいると思うので、こういう連携する機会や一緒に考える機会がこれからもっと増えると、札幌全体として冬のアート活動が活性化するような気がします。

今村　どの方もアプローチが少しずつ違ったのがよかったと思っています。それぞれのあり方や場所性ということもあるし、プロジェクト型ということもありますし、それぞれが違う立ち位置で、その場所やその雪に対してアプローチしているところがすごくよかったので、これは各自、続けつつ連携していければと思います。

柴田　僕は時間が余ったら話をしようと、氷の造形のつくり方のメイキングのスライドを用意していました。札幌は新しい都市で伝統工芸があまりないように言われますが、氷の造形は伝統工芸のような気がしています。その伝統的な技術を札幌は持ちはじめていて、それを一度、北海道の冬の造形の技術として書物か何かにまとめた方がいいのではないかと思っています。それをしっかりと意識して、世界発信できるくらいの意識があってもいいかなと。

そして、冬に開催するときにぜひ開拓してほしいのが、スポンサーです。冬にはまったく別のスポンサーがいて、それはとても魅力的な存在だと思うのです。ウィンタースポーツ、アウトドアなど、そうしたところが芸術への新しいスポンサーとして期待できるのではないでしょうか。ですから、芸術祭をやるときには、そこら辺も考えるといいと思います。

吉崎　どうもありがとうございます。本当にまだまだ可能性がありそうですね。

今日の話を通して、札幌、北海道の冬に対し、アートの側面からいろいろと関わっていけるのではないか、多くの人が気づきを起こすきっかけになるのではないかということを感じていただけたように思います。こういう機会を繰り返しながら、場合によっては、アート関係者だけではなく、スポーツ関係者や登山家など、いろんな分野の人がいるとまた違った冬との向き合い方が出てくるかもしれませんので、多方面の方々と今後も考えていければと思っています。

それでは、本日はこれで終了いたします。皆さん、どうもありがとうございました。

映像：ニナ・フィッシャー &マロアン・エル・ザニ〈10 sec. thinking about future〉、
建築：赤坂真一郎〈テントビレッジプロジェクト2009〉スノースケープモエレⅣ、2009年、モエレ沼公園　撮影：小牧寿里